

滋賀県米原市醒井の湧水と暮らし

— 醒井七湧水を中心に —

廣 部 あすか

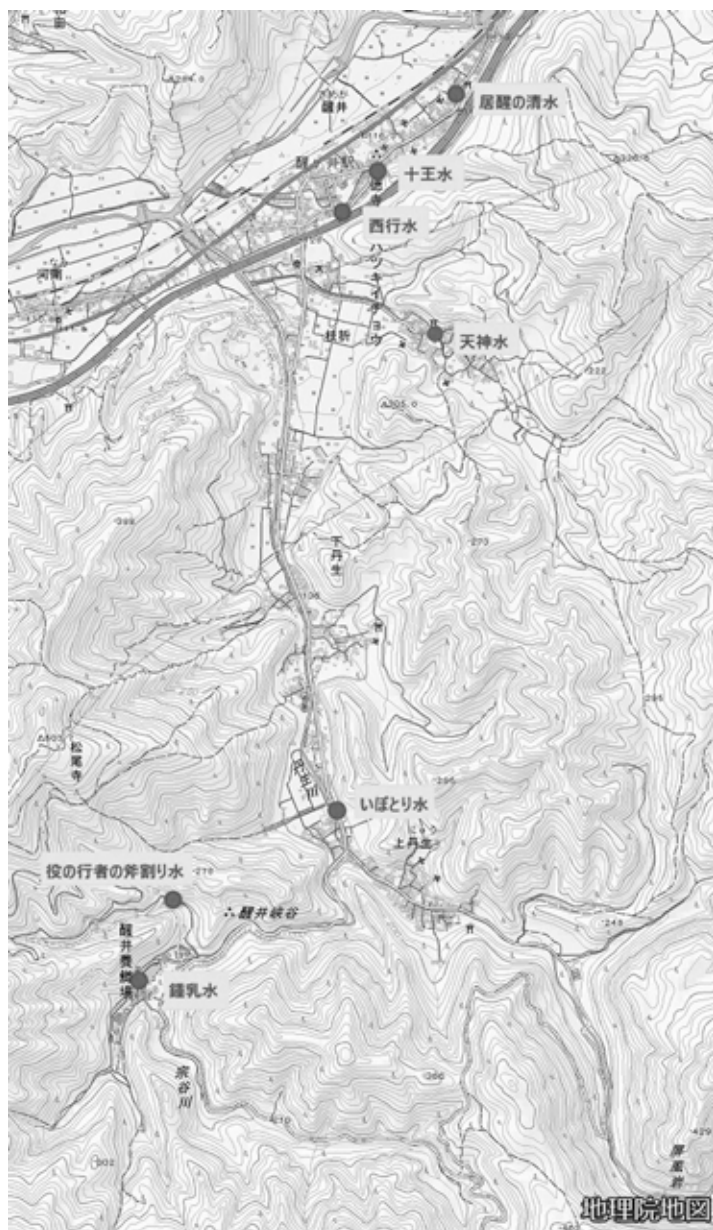
一 調査地の概要

滋賀県北部の湖北地方に位置する米原市醒井は、鈴鹿山系の最北端にある霊仙山（標高一〇八四m）の麓に位置している。江戸時代の醒井村は坂田郡に属し、中山道の宿場町が置かれていた。明治三年（一八八九）、醒井（郡山藩領）・一色（宮川藩領）・枝折（彦根藩領）・上丹生・下丹生・樽が畑の六つの地域が合併して醒井村が成立した。昭和三十一年（一九五六）、息郷村・米原村と合併して米原町となった。平成一七年（二〇〇五）二月、山東町、伊吹町、米原町が合併し米原市となり、同年一〇月、米原市と近江町が合併して現在の米原市となった。

筆者は、平成二七年（二〇一五）八月に醒井七湧水を中心とした調査を実施し、醒井に加えて枝折・上丹生でも聞き取りを行った。なお、三〇年（二〇一八）九月にも補足調査をおこなった。

二 醒井の歴史と文化

醒井宿は、中山道の六一番目の宿場町で、現在の米原市にある柏原宿（旧山東町）、番場宿（旧米原町）と並んで人々の憩いの場として栄えてきた。『実暁記』には、京都―鎌倉間の道中にある六三の宿駅のひとつに「佐目加井」という名がみられる。成立時期は不明だが、元禄年間の明細帳に慶長七年（一六〇二）の検地高の記載がある



地図1 醍井七湧水の分布

ことや、同年、徳川家康の中山道整備にあわせて設けられたともいわれており、この頃にできたと考えられている。醒井は鎌倉時代に記された『東関紀行』（音に聞きし醒が井をみれば云々）とある）や阿仏尼の『十六夜日記』（「結ぶ手に濁る心をすすぎなば 憂世の夢や醒が井の水」）などの紀行文や、江戸時代に描かれた歌川広重、溪斎英泉の「木曾街道六拾九次之内・酔か井」にも登場する。また、江戸時代には享保九年（一七二四）まで幕府領、その後は大和郡山藩領となった。宿は街道を中心に両側に家が建ち並ぶ街村状の景観で、宿内の上水道は、東側二割程度が堀井戸を使用し、西側八割程度が醒井水流を使用するなど、東西で異なっていた。農業用水は醒井の地藏川の水のほか、集落北側を流れる天野川から引いて利用した。醒井資料館（旧醒井郵便局）は大正四年（一九一五）年に建てられ、昭和四八年（一九七三）まで郵便局として使用された。ヴォーリスが設計した擬洋風建築である。

また、平成二七年（二〇一五）四月には、滋賀県内の人々の暮らしの中に水が息づいていることが評価され、県内各地の水辺景観や信仰の場などが「琵琶湖とその水辺景観 祈りと暮らしの水遺産」として文化庁より「日本遺産（Japan Heritage）」に認定された。醒井宿はこの「日本遺産」の一部となっている。

三 枝折・丹生地域の特徴

枝折は醒井の南側に位置する集落である。天野川支流の丹生川上流に位置する（写真1）。地名は「枝折」と書いて「しおり」と読む。六月、九月、二月には、天神祭が行われ、一七時ごろから小学生（最近は中学生も）が参加し、ろうそくで行灯に明かりを灯す。広い土地と水の豊富な地域の特性を活かし、米や野菜の栽培が盛んである。特に米作りには水が重要であり、水田が広がっている。

枝折の南側、丹生川のさらに上流に下丹生・上丹生の集落がある。丹生は木工業が盛んで、「木彫りの里」と呼ばれる木彫り職人の町である。この地域の木彫りの起源として、上田勇助と川口七右衛門が京都で木彫り技術を学

び、上丹生に戻って神社仏閣の彫刻をしたことが最初であるといわれている。おもに浜壇（長浜仏壇）などの仏壇関係の仕事や、大工、彫刻職人が多い。田畑面積が狭く、山林が広い地域のため、このような職業が発展したという。

人々の日常生活だけでなく、地域の仕事を営むうえでも、水は欠かせない存在である。上丹生村には、松尾寺村が合併され小字として残っている。

四 川と暮らし

醒井の北側には、東から西へと天野川が流れている。地蔵川は天野川の支流で、湧水の水を集めて醒井の集落内を東から西へと流れ、醒井の西側で天野川に合流している（写真2）。



写真1 丹生川

地蔵川は醒井の人々の暮らしと密接に結びついてきた。地蔵川にはとどころに右の階段が設けられている。これは地域の人々が洗いや物をする場所であった。川端（川戸）などと呼ばれている。現在でも、地蔵川で飲み物や野菜を冷やすことがある（写真3）。また、家で使う切り花を川につけている光景もよく見られる（写真4）。このようにすると、花が元気になるといふ。さらに、料亭では川に囲いをして、マスなどの魚を飼い、生簀代わりに使っている（写真5）。

旧醒井郵便局でガイドをされている男性によると、この地域の人々にとって水は信仰の対象というよりも生活の一部となっている。昔は洗いや風呂などにも利用していた。現在は、上下水道が通ったため、野菜を冷やす時などに使用している。周辺地域の水系に関して、長浜には伊吹山から姉川へ注ぎ、醒井では霊仙山から注いでいる。田村周辺（現長浜市田村町）は赤い金気水（赤く濁った水）が出ると聞いている。霊仙三蔵法師ゆかりの霊仙山から流れる丹生川は、南から北へと流れ、醒井の西側で天野川に合流している。丹生川上流域の上丹生では、宗谷川（昔は「総谷川」と表記）が丹生川に合流している。

丹生で木彫り職人の男性によると、仕事の



写真2 醒井宿内を流れる地蔵川



写真3 地蔵川で冷やしているスイカ

工程のなかで、彫り物の木を柔らかくするために木を川に浸けていた（写真6）。この工程はほかにも、のみで叩いた部分を膨張させて、きれいに金箔を貼る効果もある。さらに男性が子どもころは、丹生川をせき止めて水遊びをしていた、という。水が冷たくて気持ちがいよいよ遊び場であったという。地域の人々みんなが水を汚さないように気を付けていたため、川は昔の方がきれいで魚も泳いでいた。

五 湧水（醒井七湧水）の利用と保全

1 醒井七湧水の現状

① 天神水

枝折にある（写真7）。菅原道真が祀られていることから、「知恵の水」と呼ばれている。水は冷たく透明で水底も見える。魚も泳いでいる。枝折の集落内にあり、水は水路を通って枝折川へと流れている。生活用水や農業用水のほか、水の冷たさを活かして夏場は冷蔵庫代わりに利用されていた。灯籠には「灌田水」と刻まれている。米原市による看板が設置されている。

天神水から流れる水路で花瓶を洗っていた女性によると、この水は伏流水で、水温は年間一四〜一六℃程度に保



写真4 地藏川につけた花



写真5 地藏川の生簀

たれている。夏は冷たく、冬は暖かい水である。家の前の水路も天神水から水が流れている。用水路で田んぼに水を引いたり、昔は飲み水に利用したりしていた。現在も生活用水として使用されている家庭が一軒ある。昔は天神水の近くまで家があったが、現在は芝生で整備されている。泳いでいる魚はニジマスである。

② いぼとり水

上丹生にある(写真8)。湧水の目の前は舗装された道路で、駐車場も整備されているため、車で訪れることができる。いぼとり地蔵の隣に山から水が湧き出ているが、「この水は飲めません」という注意書きがある。米原市教育委員会ほうしよぼうそんいの看板によると、法性坊ほうしよぼうそんい尊意という平安時代中期の天台宗の僧で上丹生で生まれたと伝わる人物が存在し、父母が子宝を祈った山であることから、この山は「子こ祈ねり山」と呼ばれ、この水は「法性坊の初洗いの水」と言われている。いぼが取れるという言い伝えがあり、説明



写真6 木彫り



写真8 いぼとり水



写真7 天神水

文が書かれた看板も設置されている。

近くの畑で農作業をされていた男性によると、いぼとり水は、いぼが取れるという言い伝えがある水で、口コミによって観光客が訪れている。水をよく調べたら菌がいるのかもしれないため、本当は飲まない方がよいが（水を飲まないように注意看板が設置されている）、少し水を口に含むと水が甘く感じる。男性は畑仕事の後、手や顔を洗うのに水を使用している。養鱒場

場へ向かう途中に、別の湧き水がいか所ある。その場所の水には石灰が含まれていないと聞いている。養鱒場の一番奥にも発電所があった場所に水が湧いている場所がある。

この地域の町内会長の男性によると、昭和三九年（一九六四）に水道が通ってからは山水を使わなくなったが、それ以前は川で洗い物などしていた。また、山水の利用として「簡易水道」がある（写真9）。山の水槽に水をためて、自宅に水を引いている。現在も二〇軒程度が利用している。水量の調整ができないため、水圧がばらばらで、貯水がない時は水が出ない。おもに生活用水（洗い物・お風呂・水やり）のための水で、昔は飲み水にも使っていた。

③ 役行者の斧割り水

上丹生にある（写真10）。醒井養鱒場の近くにある食事処「醒井楼」の玄関脇に流れている。役行者が堂を建てる際、斧で石を割ったところ、水が湧き出てきたと言われている。「延命長寿の水」と呼ばれている。

松尾寺の八〇代目住職の男性からは、役行者について以下のような話をうかがった。役行者は六八〇年〜六八四



写真9 簡易水道

年（白鳳時代）にこの地を訪れた。鉄鋼脈・金鉱脈・水脈などの山の恵みへの感謝と山仕事中の安全を祈願しながら、山仕事と宗教が結びつき、山を大切にす思想が育まれた。役行者には、水にまつわる伝説が多く、前鬼（夫）と後鬼（妻）の従者が身回りの世話をし、前鬼は斧を、後鬼は壺を持っていく。この湧水は役行者が、水がなかったこの地のために、斧で岩を割るとそこから水が湧き出てきた。

江戸時代中期には、この松尾寺村（後に上丹生村に合併）には一〇〇名ほどの人々が住み、その暮らしを支える水源となっていた。この水源は山の奥にあり、近づくことは難しく、水源の保護のためにも現在立ち入りはできないが、水は醒井楼の玄関横に引いている。阪神淡路大震災や、平成一〇年（一九九八）の台風一一号の被害により、水の流れが変わったり、水量が少なくなったりしている。

④ 居醒の清水

醒井にある（写真11）。日本武尊（ヤマトタケルノミコト）が伊吹山の毒氣に当たり、その体を癒したという伝説が残る水である。もともと天然記念物の「醒井の不断桜」があったが枯れたため、現在その場所に「日本武尊の像」が建てられている（写真12）。『木曾路名所図会』で居醒の清水は、十王水・西行



写真11 居醒の清水



写真10 役行者の斧割り水

水とあわせて三水と呼ばれ、腰掛石・鞍掛石・影向石・蟹石の四石（現存は腰掛石・鞍掛石・蟹石。影向石は居醒の清水から西におよそ三〇〇メートルの源海寺近くにあったといわれている。）とともに醒井の名所とされている（写真13）。この伝説の水に関して、『古事記』や『日本書紀』のほか、『近江国坂田郡志』、『近江名所案内』、『胆吹山案内』などにも記されている。平成の名水百選に選ばれ、水質は日本一とも言われている。『近江名所図会』にも水辺の様子が描かれている。

⑤ 十王水

醒井にある（写真14）。天台宗の高僧・浄藏法師が水源を開いたことから、もともとは「浄藏水」と呼ばれていたが、近くに十王堂があったことから「十王水」と呼ばれるようになった。現在は、川の中に燈籠が建てられ、水源には立ち入ることはできないため、燈籠のみ確認した。



写真13 腰掛石・鞍懸石



写真14 十王水



写真12 日本武尊の像

⑥ 西行水

醒井にある（写真15）。茶屋の娘が西行の飲み残した茶を飲んだところ、男の子が生まれた。これを聞いた西行が「まことに我が子なら元の泡に戻れ」と唱えると、泡になって消えたという伝説である。子どもに関する伝説が残る水であり、「子授かり水」とも呼ばれている。湧水の隣には、水子供養の場所もある。観光客の女性によると以前は水を飲むことができるようになっていたが、現在は飲むことができなくなっている。

⑦ 鍾乳水

霊仙山の鍾乳洞から湧き出る宗谷川の源流である（写真16）。松尾寺の八〇代目の住職の男性によると、四〇〜五〇年前までは、山の上の水源も公開されていたが、観光客の増加とともに環境が悪化し、水源の保護のため現在は立ち入り禁止となっている。水は醒井養鱒場の休憩施設の横に引かれており、見ることが出来る。

2 醒井七湧水の保全と活用

醒井の湧水のなかで、以上の七つは「醒井七湧水」と名づけられ、パンフレットなどにも「七湧水めぐり」として紹介されることが



写真15 西行水



写真16 鍾乳水

多い。七湧水と呼ばれるようになったのは平成になってからであるが、醒井の湧水は昭和初期にも注目されていた。昭和十三年（一九三八）には、童謡作家の野口雨情氏が醒井を訪問し、「醒井小唄」を作詞している。

『醒井小唄（作詞・野口雨情 作曲・駒井一陽）』

忘れなざるな醒井町は南霊仙北伊吹

- 不断桜聞くさえいとし冬の真中に花が咲く
- 湧いてつきない居ざめの清水 軒場伝いに流れゆく
- お腰掛石 鞍掛石と 思やいく年水の中
- ひでり続きにや尻ひやし地蔵かけりや恵の雨が降る
- 毛槍先箱 昔をしのぶ 今になつかし中山道
- 西行さんでも浮名を残す 今につたわる沱児塚
- 琵琶湖帰りにや 醒井おより ここにや名高い養鮮場
- 近江醒井養鱒場は 今じゃ世界に名がひびく
鱒になるなら宗谷川の清き流れの虹鱒に
- かおる青葉に鱒さえおどる溪で鱒つりや気もはれる
- 役の行者の 建てたる寺は 飛行観音松尾寺
- 葉附公孫樹は 醒井町に見たか聞いたか了徳寺

※○は醒井八景。「忘れなざるな」↓「忘れしやんすな」と発音する。

「醒井七湧水」といわれるようになったのは平成六年（一九九四）ごろである。国の環境保全委員を務めていた松尾寺の七九代目の住職であった近藤氏が、「豊かな水は里山にあり」という理念のもと、水の根源である里山を見直すことが重要だと考え、自然保護の活動を推進したことがきっかけであった。近藤氏は岐阜県の飛騨高山などの他府県を訪れ、その地域の活動を参考に、米原市・醒井でも「水」で人を呼ぶことができないかと考え、梅花藻^{ばいかも}やハリヨとともに観光の名物として注目した。この地域には、大小合わせて数多くの湧水があり、昔からの言い伝えが残る湧水も多い。さらに、霊仙寺七か寺と呼ばれる七つの寺や、松尾寺の七不思議といわれる話（役行者の斧割り水・飛行観音・はさみ岩など）があり、湧水のなから代表的な七か所が選ばれ、醒井七湧水として町のシンボルとされた。醒井七湧水が制定された平成六年（一九九四）ごろから、近藤氏をはじめ、地元の人々が地域振興（ウオーキングイベントなど）の取り組みが活発に行おこなわれるようになった。その活動が続けられて現在定着してきている。その結果、現在の醒井は、梅花藻、ハリヨ、ほたる、ニジマスなどで有名な地域となった。醒井楼の女将は、醒井の湧水について、どの水も幸せをよぶ水である、と語る。きれいな水は人の思い（心）であり、物や自然を大切にすることを伝えていきたいという思いは、醒井楼の女将（松尾寺七九代住職の妻）や松尾寺の現住職（七九代住職の息子）を始め、醒井・枝折・丹生の人々に受け継がれている。

現在、醒井のほぼ中央部の北側にJ R醒井駅があり、居醒の清水・十王水・西行水・天神水は比較的近く、歩いて散策することができる。いぼとり水・役行者の斧割り水・鍾乳水は駅から三〜四キロメートルほどある。これらは歩い



写真17 梅花藻

て行くことも可能であるが、平成三〇年（二〇一八）四月に路線バスが廃止になった後、バスに代わる交通手段として予約制の「マイちゃん号」というタクシー（JR米原駅からも乗車可能）が運行している。

六 おもな動植物

梅花藻 キンポウゲ科の沈水植物で、梅の花に似た小さな白い花を咲かせる（写真17）。花は六月から八月に見ごろを迎える。醒井を流れる地蔵川は水温が年間を通して平均一四℃の清流であるため、梅花藻が広く生育している。梅花藻が増えすぎると流れが悪くなるため、七月の川掃除の際に、地域の人々が適度な刈り取りをおこなっている。

ハリヨ トゲウオ科の魚で体にトゲをもち、驚いた際になどにトゲを立てて威嚇する（写真18）。冷水を好み、水温が一九℃以上になると生きられない。日本では、滋賀県のほか、岐阜県・三重県の湧水地帯に広く生息していたが近年の湧水の減少により、現在では岐阜県西部と滋賀県東北部のみ生息している。絶滅危惧種に指定され、保護活動がおこなわれている（写真19）。旧醒井郵便局でガイドをされている男性によると、ハリヨが絶滅した



写真18 ハリヨ



写真19 ハリヨ保護看板

地域からの依頼で、醒井のハリヨを少し分ける取り組みがあったが成功しなかったという。ニジマス サケ科の魚で、全体に黒点と体側に赤みを帯びた模様がある。その名をよく知られている魚であるが日本古来の種ではなく、明治時代にアメリカから移入された。

その他 ビワマス、イワナ、ホタルなどが生息している。

七 醒井養鱒場

丹生川支流の宗谷川最上流部にある(写真20)。明治二年(一八七八)、琵琶湖の固有種であるビワマスを増殖するため、醒井村枝折字東出川に設立された県営枝折ふ化場は日本で最初の孵化場である。明治十二年(一八七九)に現在の場所に移転された。明治一八年(一八八五)、近江八幡市の西川氏に払い下げられて西川養魚場となり、明治三八年(一九〇五)に大阪市の藤野氏が譲り受けて宗谷藤野養魚場となった。昭和四年(一九二九)に県営に復帰し、滋賀県水産試験場附属醒井養鱒場となる。また、昭和二六(一九五一)に滋賀県醒井養鱒試験場、昭和五二年(一九七七)には滋賀県醒井養鱒場となった。マスの養殖を成功させるなど、その施設・研究環境が評価されて「東洋一の養鱒場」と呼ばれた。場内の大きな池で釣りを楽しんだり、魚について学んだりすることができる(写真21・22)。

松尾寺の八〇代目の住職は以下のように語る。養鱒場は研究・飼育施設とし



写真20 養鱒場

て始められた。外国にくらべ、牛・豚・馬などの肉を食べることが少ない日本人にとって、魚を養殖し食卓に運ぶことで、国民の健康増進へとつなげようとする方針があった。

明治に北米からレインボートラウト（ニジマス）とブラウントラウトを移入した際、養殖するにあたって、豊かで安定した水が供給でき、交通が便利な地域として醒井が選ばれた。この地域の水の水温は、マスの養殖には適しているが、琵琶湖の水深深くに棲むビワマスにとっては少し冷たいかもしれない。

旧醒井郵便局でガイドをしている男性からは以下のようなことを聞いた。この地域の水温は年間を通して一四℃程度であり、この水温はフナやコイには冷たすぎるともいえる。一方で、水温が低くてきれいなのでマスが育つ。個人でマスを飼っている人もいる。

おわりに

今回の調査により、醒井の人々の、水との関わりや、水や地域に対する思いを、直接うかがったり、自分の目で確認したりすることができた。湧水に関して、「醒井七湧水」という代表的な場所を巡り感じたことは、特別な水



写真 21 養鱒場



写真 22 養鱒場

としての保護ではなく、この地域の生活の中で営まれた生活の中の一部という一体感である。現在では、宿場町という地域性と独自の名産とともに、観光分野への地域資源の活用に取り組まれ、宿場町らしい「人が集う場所」となっている。お年寄りから子どもまで、幅広い世代が参加して地域を盛り上げている雰囲気があるように感じた。今回の調査では、聞き取りに未熟な点が多かったことを反省している。醒井のみなさんが温かく親切に接して下さったことに、感謝の気持ちをお伝えしたい。

(参考文献)

- 江竜喜之 二〇一七 『中山道道中案内 関ヶ原から三条大橋』 サンライズ出版
淡海文化を育てる会 二〇〇三 『近江歴史回廊 近江中山道』 サンライズ出版
文化財保護課 二〇一一 『滋賀県の民俗―湖東―』 滋賀県教育委員会
中井均 二〇一七 『古地図で楽しむ近江』 風媒社
中山道近江路連合会 二〇〇二 『中山道名物今昔』 サンライズ出版
長浜みーな編集室 二〇〇六 『みーな びわ湖から… 90号』 長浜みーな協会
長浜みーな編集室 二〇一七 『みーな びわ湖から… 100号』 長浜みーな協会
米原市経済環境部環境保全課 二〇一三 『スローウオーターなくらし ―未来へ受け継ぐ水源の里まいばらの水文化―』 米原市経済環境部環境保全課
米原市商工会 二〇一一 『これから淡海、これから米原へ』 米原市商工会
米原町企画調整課内町史編さん委員会 一九九六 『米原町史資料集第一冊 明治の村絵図』 米原町
米原町企画調整課内町史編さん委員会 二〇〇二 『米原町史 通史編』 米原町役場

(付記)

写真はすべて筆者の撮影である。